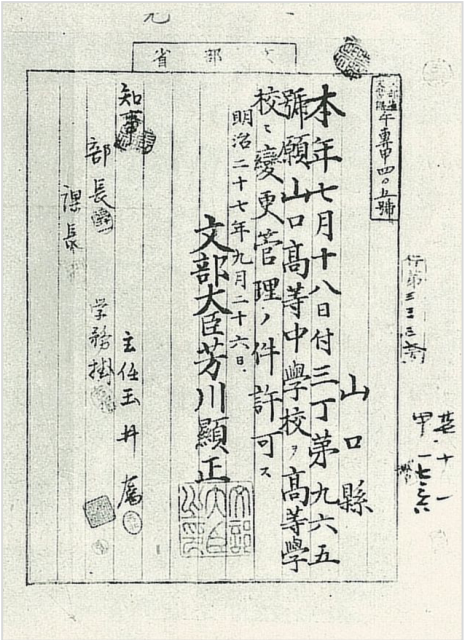
県内初の高校誕生

学制改革により高等学校へ

高等中学校の制度が確立して7年後の明治27（1894）年6月、高等学校令が公布され、高等中学校は高等学校となった。これに伴い、山口高等中学校も同年 9 月 27 日文部省告示第8号によって「山口高等学校」と改称された。（以下、「旧旧山高」という。）

当時全国に開設された高等学校は第一から第五までの高等学校と旧旧山高の6校のみで、当時の高等学校は、法令上は専門学部が主体であるが、帝国大学予科としての性格が強く、旧旧山高も修業年限3年の「大学予科」とした。

校則等は概ね高等中学校時代を踏襲した形で制定されたが、修業年限が1年延長して3年となったため、組織改正にあたっては、学年のスライド等、旧制度の生徒に対して種々の配慮がなされた。



山口高等学校管理許可指令書
（『山口高等商業学校沿革史』より）

また、学制改革の結果、旧制度の高等中学校予科は廃止になったが、残存する生徒の為に、大学予科の下にしばらく旧高等中学校予科を存置し、翌年4月、山口県尋常中学校の設置をもって全てが解決した。

第3年	一部	法科	5	12	52
		文科	7		
	二部	工科	15	18	
		理科	3		
		農科	0		
	三部	医科	22	22	
第2年	一部	法科	20	27	66
		文科	7		
	二部	工科	18	18	
		理科	0		
		農科	0		
	三部	医科	21	21	
第1年	一部	法科	24	29	105
		文科	5		
	二部	工科	48	51	
		理科	1		
		農科	2		
	三部	医科	25	25	
合計					223

生徒学級別人員表（明治30年9月末日調）
（『山口高等学校一覧』より）

山高は時代と共に3校あって、
後の山口高商に繋がるこの官立山口高等学校を
旧旧山高と呼び、
大正8年に創立する官立山口高等学校を
旧制山高と呼んで、現在の県立**山高**と区別しているよ。

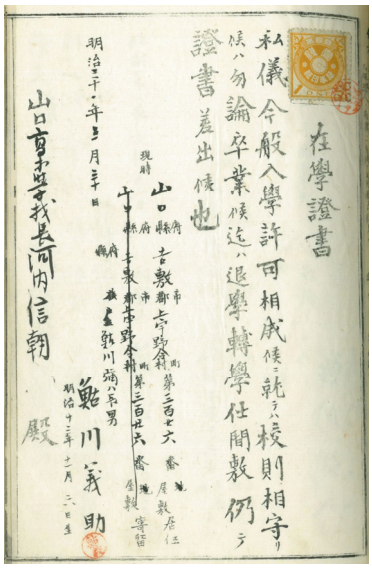
地元優先の入学制度

全国では高等学校大学予科に入学できる者は、年齢17歳以上で尋常中学校を卒業した者とされ、募集人員を超過する場合は選抜試験を行っていた。しかし、成立に特殊事情のある旧旧山高においては、高等中学校時代からの慣例で県内在籍者に対して優先入学の特典を認めており、山口県尋常中学校卒業生はことごとく無試験で入学できる上、授業料も半額だった。しかし、全国的に高等教育熱が高まり入学志願者が急増する明治30年以降は、この優遇制度を維持することが難しくなっていった。

山口高等学校帽章
（明治28年）

教官保証制度の創始

岡田校長の発案により、独自の制度として、生徒の保証人2名の内、1名は必ず旧旧山高の教官を充てていた。一人の教官が受け持つ生徒数は約20～30名で、保証教官の仕事は生徒指導全般に及んだ。学業や素行に注意し、舎監や担任教官と連携し、父兄とも連絡を密にして生徒指導に完璧を期した。場合によっては授業料や修学旅行費の立替や援助を行うなど学業・生活全ての面で補導訓育に当り、個人指導を徹底していた。この制度は後の高等商業学校にも引き継がれている。



在學證書

私儀今般入學許可相成候ニ就テハ校則相守リ候ハヽ論卒業候迄ハ退學轉學仕間敷仍テ證書差出候也

明治三十年三月三日

山口縣第二百七十六番居住
吉敷郡宮野村第二百廿六番地
現時
山口縣第二百廿六番居住
吉敷郡宮野村第二百廿六番地
鮎川彌八次男
鮎川義助

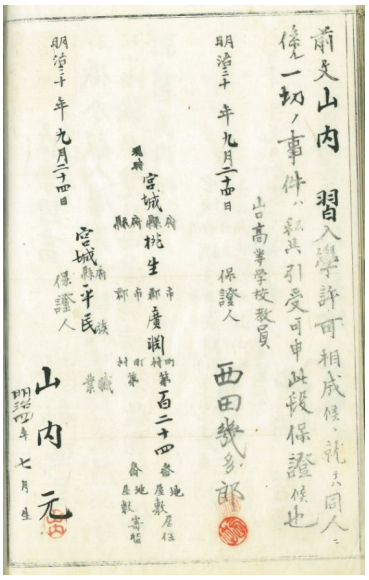
明治十三年十二月二日生

山口高等學校長 岡内信朝

在学証書

明治 30 年の在学証書には、生徒「鮎川義介」が提出したものがある。（左）

また、別の生徒のものには当時旧旧山高校で英語や独逸語を教えていた哲学者「西田幾多郎」の名が保証人の欄に記載されている。（右）



前文山内習入學許可相成候ニ就テハ同人ニ係ル一切ノ事件ハ私共引受可申此段保證候也

明治三十年九月二十四日

山口高等學校教員
保證人 西田幾多郎

宮城縣桃生郡
現時
宮城縣桃生郡
平民
職業
保證人 山内元

明治三十年九月二十四日

明治四十年七月生

全寮制の実施

高等中学校時代から増改築を繰り返していた寄宿舎だったが、防長教育会の資金援助により、明治28年9月、ついに全てが完成した。新築寄宿舎は南寮・中寮・北寮の3棟に分かれ、各寮2階建、全35室、階上を寝室、階下を自習室とし、談話室の設備もあって生徒約200人が収容可能となった。これにより、かねてからの念願だった全寮制が実現した。

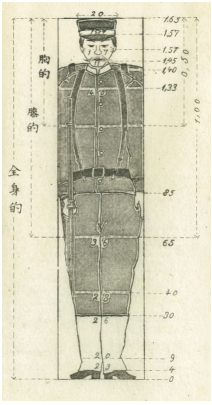
行軍演習と修学旅行

修学旅行は、明19（1886）年に東京高等師範学校が「長途遠足」の名で、行軍旅行に学術研究の要素を取り入れたのが始まりといわれている。

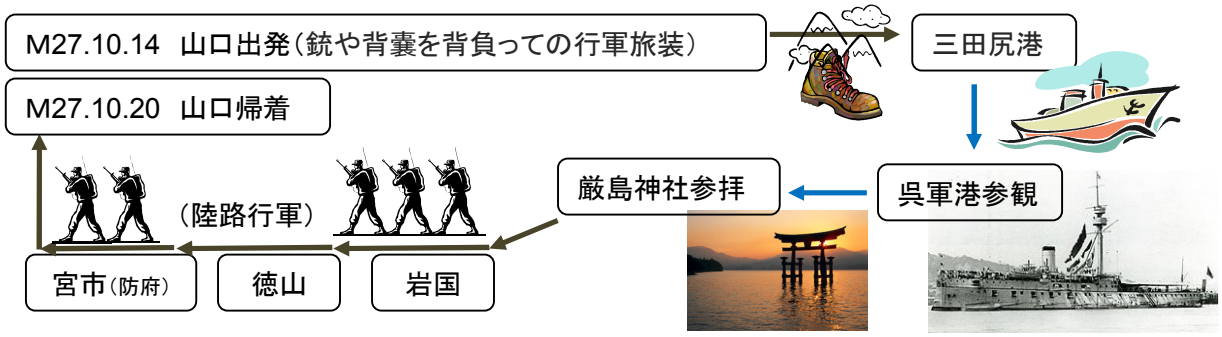
山口高等中学校から旧旧山高に改称された明治27年は日清戦争が起こった年であり、明治37年には日露戦争開戦へと時代は軍事色を強めていた。そのため、体操の授業は教師に陸軍予備将校を任用し、専ら兵式教練と行軍及び発火演習に充てられた。

兵式教練の教科書

人像的（歩兵射撃教範附図）



＜明治27年に行われた行軍演習＞



例外として、明治32年から35年までの4年間は行軍演習とは別に一週間程度の修学旅行が実施された。宇佐八幡宮や耶馬渓、太宰府などの名所旧蹟や八幡製鉄所、三菱造船所などを見学した。「汽車・汽船を乗り継ぐ旅行は、行軍と違って全く貴公子的旅行である」と学友会報にその嬉しさが報告されている。年によっては出雲地方や大和地方などにも足を延ばしていた。

日露戦争の影

明治37年2月、日露戦争が開戦し、山口歩兵第四十二連隊が出動した5月には、松本校長以下職員生徒一同は湯田の郊外に赴き万歳三唱で見送った。

当時の様子は、「満洲の野より勝報頻りに来ると共に、一方戦死傷者も夥しく、陣没英霊の凱旋相次ぐや、学校哀悼無言裏に之を迎へ、悲壮なる劇的の送迎が幾十度となく繰り返された」と『山口高等商業学校沿革史』に記載されている。

結局、旧旧山高からは総勢13名の教職員が召集され、うち2名戦死、2名が負傷した。特に体操教官については、補充する度にすぐ召集されるため、後任者もままならず、明治37年末には山口留守連隊下士官を派遣してもらって学期末の試験を辛うじて実施した程だった。

小松宮親王殿下の御染筆賜る

旧旧山高時代の皇室関係事項としては、皇太子殿下御成婚（明治33年5月）、皇太孫殿下御誕生（明治34年4月）と慶事が続き、校長は参賀のために上京、職員生徒一同は講堂に於いて奉賀式を挙行した。

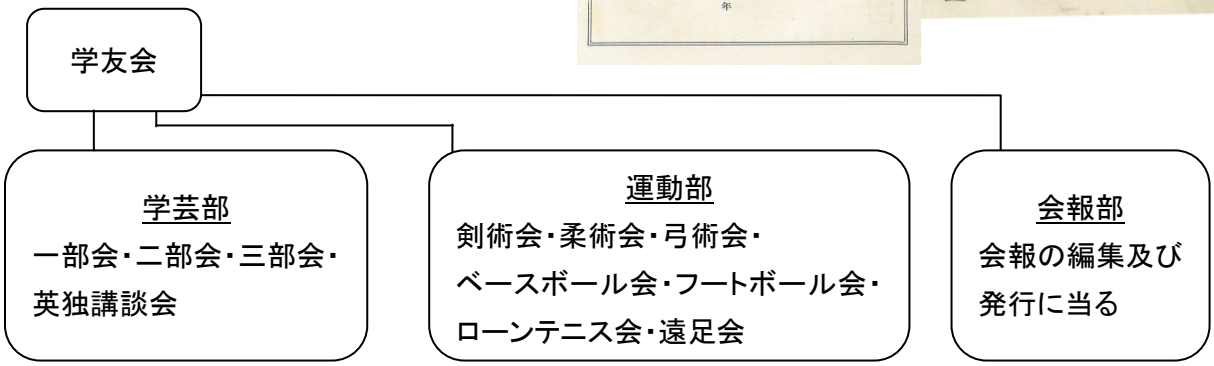
講堂の扁額
（「山口高等商業学校卒業記念アルバム」より）

また、明治34（1901）年4月には、日本赤十字社総裁の小松宮彰仁親王殿下が山口支部総会に出席され、旧旧山高はその休憩所になった。職員生徒は湯田郊外に送迎し、全校挙げて歓迎行事を行った。記念に御染筆下賜を請願したところ、11月に「成就德器」の扁額を賜った。この御染筆は講堂に奉懸され、後の山口高商時代にもわたって長く掲げられていた。

小松宮彰仁親王殿下御染筆
（『山口高等商業学校沿革史』より）

学友会の復興

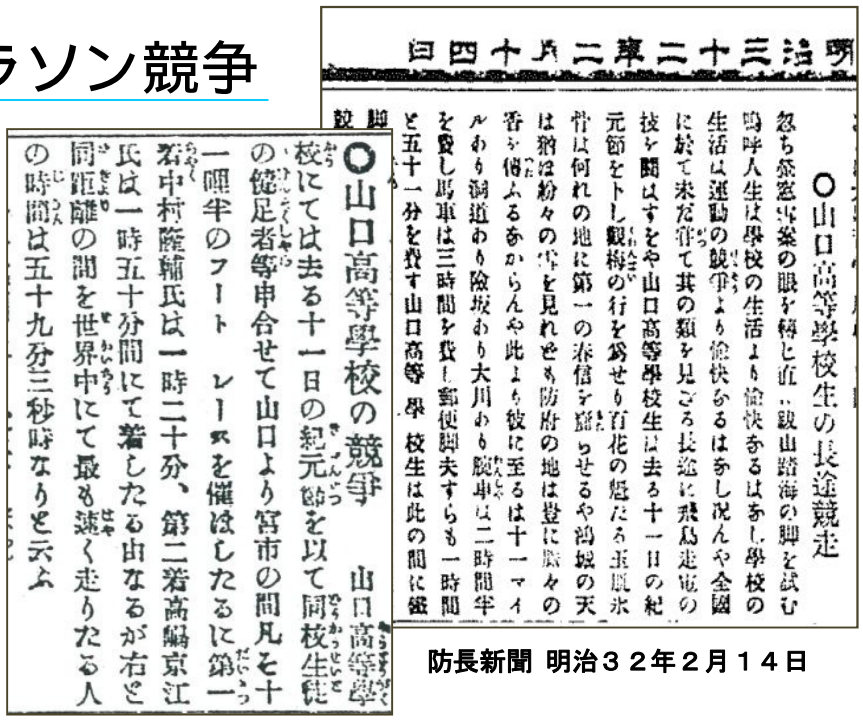
山口高等中学校時代に起きた寄宿舎事件により学友会は廃止されていたが、高等学校に改称後少しずつ復興の機運が盛り上がり、明治31年1月17日「山口高等学校学友会」として正式に発会式を挙げた。



日本最初のマラソン競争

運動部陸上遠足会は、明治３２（1899）年２月１１日、山口ー宮市（防府天満宮）間約18kmを走破するという快挙を遂げた。

当時の運動会では最長でも 1,000m走程度だったため、この長距離走は各方面の注目を集め、「ジャパンタイムス」や「時事新報」などもこの壮挙を報道した。


明治三十二年二月十四日

○山口高等學校生の長途競走

忽ち蒼窓雪案の眼を轉じて直に一級山踏海の脚を試む嗚呼人生は學校の生活より愉快なるはあし學校の生活は運動の競爭より愉快なるはあし況んや全國に於て未だ嘗て其の類を見ざる長途に飛鳥走兎の技を闘はすをや山口高等學校生は去る十一日の紀元節をトし觀梅の行を爲せり百花の魁たる玉肌氷骨は何れの地に第一の春信を齎らせるや鴻城の天は猶ほ紛々の雪を見れども防府の地は豊に藹々の香を傳ふるあからんや此より彼に至るは十一マイルあり洞道あり險坂あり大川あり腕車は二時間半を費し馬車は三時間を費し郵便脚夫すらも一時間と五十一分を費す山口高等學校生は此の間に盛

脚競

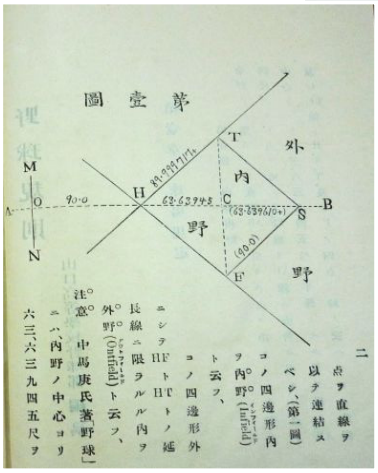
○山口高等學校の競爭　山口高等學校にては去る十一日の紀元節を以て同校生徒の健足者等申合せて山口より宮市の間凡そ十一哩半のフート　レースを催ほしたるに第一着中村隆輔氏は一時二十分、第二着高鍋京江氏は一時五十分間にて着したる由なるが右と同距離の間を世界中にて最も速く走りたる人の時間は五十九分三秒時なりと云ふ

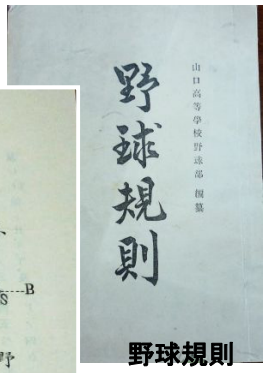
防長新聞 明治３２年２月１４日

野球部の活躍

野球部の活躍も目覚ましかった。山口県内では明治30年頃から野球が盛んになったが、当時の投手は魔球（変化球）も知らず、捕手はミットも用いない状態だった。

ルールもまちまちで混乱を生じていたため、旧旧山高野球部が明治32年に「野球規則」を制定しこれを県内の各中学校に配布した。ルールは現在とほぼ同様だが、「四球」はファイブボールズだった。（当時は4～9球の間で随意に定めてよかったらしい。）


第壹圖



野球規則

旧旧山高が主催して、県内中学校の野球大会を開催したり、他の高等学校と遠征試合を行うなど技術向上に熱心だった。特に第五高等学校（熊本）とは数度にわたり試合を行ったが、善戦するも健闘虚しく、ついに最後まで勝利を得られなかったようである。

野球をする学生たち（「山口高等商業学校卒業記念アルバム」より）

※この記事は、山口県立文書館平成 23 年度資料小展示「スポーツ時代史展Ⅳ　明治時代の野球」を参照しました。